

(二) 金武湾沿岸

1. 調査場所及び期間

場 所 金武村、屋我、伊芸、浜田、金武地先

期 間 1956年6月7日～9日 3日間

調査方法 海中踏査及び漁民部落より聞き調査

2. 生産調査

類 別	盛 漁 期	年間生産高 及び盛 数	利用価値の 述	備 考
海 人 草	5 ～ 6 月	製品 5,000斤位	高 内 訳 未	伊芸部落より浜田部落間
琉球太もづく	3 月	1,500斤位	未 用 者 な し	琉球もづくとして輸出対象された こともあるが、生産業者なし。
ひよえいさ (アーク)	2 ～ 4 月	極 少	自家用乾燥程度	魚乾製品として利用すれば自家用 嗜好物として利用可能である。
な ま こ	5月～6月頃	尾州一葉で一日 に原料700斤程度	な し	宿屋みやげや、したふやへくるて らーはおおし一町の種加が多く販売 しているが現在其の利用者なし。
ばふんりに	8月～9月	1952年度生産予 算高調査では年 間8,000斤	1954年民間加工 会社岩江産業に より一時利用さ れた。	6月現在3日 2週4日位の抜き取 りの生産高はあるが利用者なし。
いせえび	5月頃、6月頃 現在在産期の中 である。	200斤位 (1日一葉)	水軍向け売用	簡易包装箱により需要される需 要により販売されている。
玉貝 其の他	夏 漁 期	60斤位	貝殻 斤15円 貝肉 白米用	夏の漁期中採捕利用されている。
い か	5月～8月	900斤位	自家用、塩干 販売用	1954年水産資源調査報告書より。
た こ	同 年	5,000斤位	販売用	＊
か に	同 年	1,400斤位	＊	＊

3. 調査地区内における水産加工業の有無

海産加工処理場、金武村浜田部落、岩江産業により一時設置

冷蔵所 (建設済満屋) 金武村金武

鮮魚商 現在軍向け、えびの集荷販売を行つている。

4. 調査経過

イ. うに資源に就いて

昨年迄は一、二ヶ所の業者に依り開拓されたが岩江産業の場合は12月頃より操業開始し専用刺舟一隻、処理人夫延80名、技術者3名で約2ヶ月間輸出向け塩漬製品として加工生産されたが、漁期はづれて卵巣身入が悪く刺舟一隻より抜身卵巣わずか5斤位で換算がとれず一時中止された事もある。

漁業者の話によれば盛漁期は8月頃で一籠(50-60斤入)で抜身卵巣約6斤位

を得るそうで漁期には相当量採捕され、全業可能の様であるが現在利用者はない状態である。

ロ. なまこ類

湾内砂地には主として「じやのめなまこ」(俗称 ミーハヤ)が多く、「干なまこ」として戦前日本へ移出されたそうだが現在は余り採取されない状態にある。尙「じやのめなまこ」に就いては従来漁村では生酔にして嗜好せられて居る所もあるので酢漬品として調味加工せば或は新製品として大衆化されると思う。

ハ. 海人草について

生殖場所は廣範囲に分布であるが、原葉1—2寸より直径され現在では3郡線内に少量の繁殖を見受けるだけである。

5. 結 び

この地区は主に網漁業が主体で各々漁期に依り、いか、えび、採貝等の小規模な漁業が行われているが、特にいせえびに就いては研究され沿岸干渉帯の細溝を利用して金網張りの箱による蕃養が行われ、盛漁期の2ヶ月—3ヶ月間は米軍向として販売取引が行はれているようである。

うに類の塩辛、又は乾燥加工等行へは生産を増し漁民の福利を増すことが出来ると思われた。

調査略図及歩留表

